

ヘンデル《快活の人、沈思の人、中庸の人》の歌詞とその発音

第3部の場合

榎山陽子 水野みか子

ヘンデルの《快活の人、沈思の人、中庸の人》は劇場音楽の形式に則り3部構成となっている。第1部と第2部の歌詞はミルトンの『快活の人』と『沈思の人』の詩句がそのまま用いられていて、第3部は台本作家ジェネズが新たに書き下ろした歌詞が使われている。歌詞の割り振り方を見ると、第1部と第2部はそのミルトンの発音が採用されていてヘンデル時代から見ると古風な発音となっているが、第3部ではそれより新しい作曲当時の発音が使われていることが分かる。本稿では第3部について当時の発音を推定するとともにヘンデルの歌詞の表現について考察し歌詞の対訳を試みた。

キーワード：ヘンデル・*L'Allegro*・歌詞の割り付け・歌詞の発音・ホラーティウス

1. はじめに

ヘンデル George Frideric Handel (1685-1759) は《メサイア *Messiah*》作曲の前年に、同じオラトリオ様式の《快活の人、沈思の人、中庸の人 *L'Allegro, il Penseroso ed il Moderato*》(1740) を作曲した。題材は、イギリスを代表する詩人ミルトン John Milton (1608-1674) の書いた2つの詩『快活の人 *L'Allegro*』(1631) と『沈思の人 *Il Penseroso*』(1631) で、ミルトン自身の中に並存している相反する2つの気質、【快活】と【幽愁】を表現したものとされている¹⁾。

本作品は劇場音楽の形式に則り3部構成で、登場人物は第1部と第2部が「快活の人」と「沈思の人」、第3部は「中庸の人」となっている。第1部と第2部の歌詞はミルトンの『快活の人』『沈思の人』の詩句がほとんどそのまま用いられ、概ね詩行の順に「快活の人」と「沈思の人」が交互に歌う。第3部については、《メサイア》の台本も手掛けることになる台本作家ジェネズ Charles Jennens (1700-1773) が「快活の人」と「沈思の人」を調和する「中庸の人」の歌詞を自身で作成した。

ヘンデルの時代の英語はいろいろな発音変化の過渡期にあり、現代とは異なる発音も多かった。当時の文章を読んでも発音を一意に決めるのは難しいことがある。幸い、イギリス音楽には1音に歌詞の1音節を割り当てるという習慣があり、楽譜で単語の音節数とその割り振りに着目し、英語の発達史の研究成果と照らし合わせることにより、作曲者の想定していた発音を割り出すことができる場合がある。この方法を用いることにより、ヘンデルは、第1部と第2部のミルトンの詩については、作曲より約100年前のミルトンの発音をなるべく採用していて、第3部の作曲時に作られた詩には新しい作曲当時の発音を使っていることが分かる²⁾。

本稿では、台本作家が作詞した第3部について、歌詞の作曲当時の発音を推定するとともに、歌詞の表現について検討し対訳を作成することを目的とする。

2. 発音の特徴点

本作品については、第1部・第2部がミルトンの時代の発音、第3部が作曲当時の発音で書かれていることが分か

っている²⁾。それを踏まえて、楽譜からだけでは読み取れない発音の特徴を英語音韻史の研究成果と照らし合わせて以下に示す。

2.1 本作品全体に共通している 17 世紀から 18 世紀にかけての発音の特徴

a) Hence、hand 等の語の/h/の発音は、息を流すだけではほとんど音がしない³⁾。これについては《メサイア》でのヘンデルの歌詞の割り振り方からも考察されている⁴⁾。

(該当語 : Hence, hand, her, Health, headlong, happy, Heav'n, how)

b) boast の oa のように現代では二重母音/ou/と発音するものは/o:/と発音する⁵⁾。(該当語 : boast, own, old, rosy, tho', foes, those, golden moping, alone)

2.2 第 1 部・第 2 部とは異なる第 3 部の発音の特徴

第 3 部の発音は概ね第 1 部・第 2 部より現代の英語に近い発音になっているが、まだ現代とは異なるものも見られる。

a) tasted、native の a のように現代では二重母音で/ei/と発音するものは 17 世紀の方が広い/ei/で、18 世紀になると狭く/e:/となる⁶⁾ので第 3 部では狭い/e:/で発音する。

(該当語 : profane, vainly, tasted, pain, native, Moderation, grace, Nature, gave, save, way, gay, same, gait, sedate, chaste, serene, train, restrain, bane, they, obey, safely, straying, play, day, place, shades, away)

b) nature、beauteous 等、第 1 部・第 2 部では/tj/だった発音は、第 3 部では口蓋化して/tʃ/となる⁷⁾。(該当語 : Nature, beauteous, statues, structure, intellectual)

c) nation、action 等の-tion は第 1 部・第 2 部では/sjən/だったが第 3 部では口蓋化して/ʃən/となる⁷⁾。(該当語 : Moderation, Passion, caution, action, proportion)

d) pleasure、measure は第 1 部・第 2 部で/plé:zju:r/、/mé:zju:r/と歌っていた。/zj/の口蓋化は 18 世紀末までに一般化される⁷⁾ということなので、第 3 部でも第 1 部・第 2 部と同様の口蓋化前の発音であったと推定する。/u:r/の発音

は中舌化して/ər/となる(/i:r/や/e:r/は 17 世紀からすでに中舌化して/ər/となっている) ので⁸⁾、これらの語は/plé:zjər/、/mé:zjər/となる。(ure に関する該当語 : pleasure, measure, Nature, further, structure)

e) rules、prudent の u 等は第 1 部・第 2 部では/ju:/だったが、第 3 部では/j/が削除され/u:/⁹⁾となる¹⁰⁾。(該当語 : pursue'd, true, knew, frugality, rules, prudent, musing, new, due, truth, fumes, truly)

3. 歌詞の内容と表現

3.1 第 3 部の概要

第 3 部は、第 1 部・第 2 部で「快活の人」と「沈思の人」がのしり合ったり自分の好みの情景を主張し合ったりしていたのを、調和させる「中庸の人」が登場する。自筆譜¹⁰⁾には第 3 部の役柄として Moderato (中庸の人) としか書いていないが、初演時の演奏では、「中庸の人」として出てくるバスの歌手の意見に賛同するように、第 1 部・第 2 部で「快活の人」を演じた歌手や「沈思の人」を演じた歌手も出てきて中庸の良さを歌う¹¹⁾。つまり、「中庸の人」が、中庸の理想を歌っていくうちに、第 1 部・第 2 部で歌っていた「快活の人」や「沈思の人」も中庸の方がいいと歌い出し、最後に全員で中庸がいいと合唱する、という展開になっている。ヘンデルの作曲当時のイギリスでは、古代ローマ時代の南イタリアの詩人、ホラーティウス Quintus Horatius Flaccus (BC 65-BC8) の詩の英訳版¹²⁾¹³⁾が出版され、その中庸をよしとする考えが人気を博していた¹²⁾。それを踏まえて台本作家ジェネズが中庸の人の歌詞を作り、聴衆に共感を持ってもらおうとヘンデルが採用したのだと考えられる¹⁴⁾。

3.2 各曲の解説

ここでは、各曲の歌詞の内容や歌詞の表現について特徴的な点を述べる。なお、曲番号は (Novello 版¹¹⁾の番号 /HHA 版¹³⁾の番号) と表示する。また、初演時に実際に歌った歌手の役柄をその次に示す。第 1 部や第 2 部で「快活

譜例-1 音画法の例

a	(37/36) from Heav'n descending	
b	(38/37) equal	
c	(40/38) in due proportion	
d	(41/39) flight	
e	(42/40) alone	

の人」、「沈思の人」を担当した歌手が歌った曲については、その担当もあわせて示す。

(36/34) (中庸の人) Hence: boast not ye profane (ここから去れ、そなたの冒涇を自慢するな) アコンパニヤート(バス)
第3部の最初の曲で、「快活の人」と「沈思の人」の極端を嫌う「中庸の人」が登場する。beyond や excess という言葉を使って極端なことをののしる。

(37/35) (中庸の人) Come, with native lustre shine (来たれ、生まれながらの輝かしい日光とともに) アリア(バス)
「中庸の人」の自己紹介の箇所。ホラーティウスの頌歌の「困難な時でも心の平静を保つよう心掛けると同時に、繁栄の際には不埒な高揚を慎むようにせよ」(『カルミナ』第2巻 3¹⁴⁾) という言葉を基にしている。

(37/36) (中庸の人) Sweet Temp'rance in thy right hand bear (そなたの右手に心地よい節制を持て) アコンパニヤート(バス) / 合唱

バスが最後まで歌った後、合唱が最後の2行を繰り返す。「天から降りてくる from Heav'n descending」という語を含むフレーズで下降音形を用いている(譜例-1 a)。「全てのこののどかな友よ all this company」以下のフレーズは、バスの独唱の後、上記の友が皆集まってくる音画として合唱が始まる。まず「全てのこののどかな友」が「仲間に入る」ことの音画法として、all this Company のところを全員揃って歌う。そのあと次々に仲間になっていく様子の音画法として join to fill の歌詞の箇所次第に歌う声部が増えていき、最後に全員で歌うようになっている。true と knew はそれぞれ/tru:/、/nu:/という発音で押韻している。

(38/37) (中庸の人(元沈思の人)) *Come, with gentle hand
restrain* (来たれ、心優しい手で) アリア (ソプラノ)

「沈思の人」が改心して「中庸」がいいと歌う場面。ホラーティウスの「黄金の中庸」(『カルミナ』第2巻10¹⁵⁾)という言葉を基にしている^{注3)}。「盲目的に走る *blindly running*」は3回繰り返すが3回目に細かい音で降りていくのは音画法。それを受け継いで器楽も同じ形を演奏する。「平等 *equal*」の前は付点の形で、*equal* の語の部分だけ音価が均等になっているのは *equal* の音画法(譜例-1 b)。

(39/番号無し) (中庸の人(元快活の人)) *No more short life
they then will spend* (されば短い人生を歩むようなことは二度とない) レチタティーヴォ (テノール)

ヘンデルの演奏では第1部・第2部で「快活の人」を担当した歌手が歌った曲。「快活の人」が改心して「中庸」がいいと歌う。第1部・第2部で「快活の人」は歓楽や劇、舞踏などを楽しむことを喜びとしていたが、それが過度になってしまったことを反省している。

(40/38) (中庸の人(元快活の人)) *Each action will derive
new grace* (一挙手一投足が、秩序や限界、時間や場所から) アリア (テノール)

引き続き快活の人から改心した人が歌う。ホラーティウスの「諸事物の中には適度があり、すなわち適正な限度がある」(『諷刺詩』第1巻1¹⁶⁾)という言葉を基にしている。*in due proportion* 「適正な度合いで」の音画法として、いろいろな同じ音形の繰り返しが現れる(譜例-1 c)。

(41/39) (中庸の人(元沈思の人・元快活の人)) *As steals the
morn upon the night* (夜が過ぎ去り朝になり) デュエット (ソプラノ・テノール)

第1部・第2部で「快活の人」を歌っていたテノールと「沈思の人」を歌っていたソプラノのデュエット。初めは交互に歌い出し、それから絡み合って最後には揃って意見

の統一を表す。飛んでいくという意味の *flight* という語には細かい音を割り当ててその様子を表現する音画法となっている(譜例-1 d)。快活の人は第2部で「空想 *fancy*」を讃えていたが、ここではそれより真実の方がいいと歌う。

(42/40) (中庸の人) *Thy pleasures, Moderation, give* (あなたの快楽を、「中庸」よ、与えたまえ) 合唱

第3部の最後の曲、この作品全体の終曲。「中庸がいいよね、皆さん。」というメッセージを届ける。*alone* の語は1声部で歌ったり、次々に歌うなどして、ただ1つだけの意味を音画で表現している(譜例-1 e)。全体でこの曲だけ、最初から最後まで合唱となる。

4. 歌詞と対訳

以上を踏まえて、第3部の歌詞と対訳は表-1 のようになる。対訳は筆者が作成した。なお、ヘンデル自身は曲番号を付けていないため、Novello 版の楽譜による曲番号とHHA 版全集の曲番号を示す。

5. おわりに

本作品の第3部では、極端さを嫌い中庸をよしとする「中庸の人」に加えて、第1部・第2部で対立していた「快活の人」が改心した人と「沈思の人」が改心した人が登場するが、「中庸の人」、「快活の人から改心した人」、「沈思の人から改心した人」それぞれが当時一般に人気を博していたホラーティウスの言葉を基にした歌詞を歌うことで、聴衆に共感を持ってもらうという狙いがあったと考えられる。さらに、音画法を多用して、歌詞の意味が聴衆に伝わりやすくなるよう工夫をしている。発音についても、第1部・第2部で採用した100年前のミルトンの発音ではなく、当時の聴衆と同じ発音を用いることにより、第1部・第2部の考えは古い考えで、第3部の中庸をよしとする考えが今風であるという主張を示していると言える。

表-1 《快活の人、沈思の人、中庸の人》第3部の歌詞・対訳

N	H		
(36)	34	Hence, boast not ye profane of vainly fancy'd, little tasted pleasure pursu'd beyond all measure, and by its own excess transform'd to pain.	ここから去れ、そなたの冒険を自慢するな 無駄にうぬぼれた味気ない快楽を 過度に追い求めた挙句 その過度の故に痛みに変えられてしまった
(37)	35	Come, with native lustre shine, Moderation, grace divine, whom the wise God of Nature gave, mad mortals from themselves to save. Keep as of old the middle way, nor deeply sad nor idly gay, but still the same in look and gait, easy, cheerful and sedate.	来たれ、生まれながらの輝かしい日光とともに 『中庸』よ、神の恵みよ そなたは賢明な自然の神が与えてくれた 狂気の人間を自分たちから救うために。 昔から変わらぬ中庸の道を 深刻に悲しむことなく、無駄に陽気でもなく だが顔つきも足取りもなお今までと同様に 気楽に、愉快地に、平静を保て。
	36	Sweet Temp'rance in thy right hand bear, with her let rosy Health appear; and in thy left, Contentment true, whom headlong Passion never knew; Frugality, by Bounty's side, fast friends, tho' oft as foes belied; chaste Love, by Reason led secure, with joys sincere and pleasure pure; happy life from Heav'n descending, crowds of smiling years attending, all this company serene join to fill thy beauteous train.	そなたの右手に心地よい節制を持って 加えて血色の良い健康を出現させよ。 そなたの左手には真の満足 軽率な熱情には知る由もない 気前良さのすぐ近くにある儉約 しばしば敵と見まがう忠実な友 喜びを伴う親愛や純粋な快楽を 確保させるという理由での純愛 天から下ってくる幸福な生活 何年も付き添う多数の微笑み 全てのこののどかな友よ 仲間に入りそなたの魅力的な群れを満たせよ。
(38)	37	Come, with gentle hand restrain those who fondly court their bane, one extreme with caution shunning, to another blindly running. Kindly teach how blest are they who nature's equal rules obey, who safely steer two rocks between, and prudent keep the golden mean.	来たれ、心優しい手で 妄信的に死を招く人々を制止して 彼らは1つの極端を注意深く避けながら 他の極端に盲目的に走る 親切に教えよ、自然の平等な規則に従い 2つの岩の間を安全に舵を取る人々が 如何に祝福されているかを そして賢明な人が黄金の中庸の道を守ることを
(39)		No more short life they then will spend, in straying further from its end, in frantic mirth and childish play, in dance and revels night and day; or else like senseless statues seeming ever musing, moping, dreaming.	されば短い人生を歩むようなことは二度とない その目的から遠く離れて 狂気の歓楽や子供じみた劇 夜昼構わず行われる舞踏やお祭り騒ぎに迷走し あるいはうわべだけの意味のない塑像のように 思い煩い、ふさぎ込み、空想にふけて
(40)	38	Each action will derive new grace, from order, measure, time and place, till Life, the goodly structure, rise in due proportion to the skies.	一挙手一投足が、秩序や限界、時間や場所から 新しい洗練を引き出す 大がかりな組織である人生が 適正な度合いで天に昇るまで
(41)	39	As steals the morn upon the night, and melts the shades away: so truth does Fancy's charm dissolve, and rising reason puts to flight the fumes that did the mind involve, restoring intellectual day.	夜が過ぎ去り朝になり 闇が消え去るごとく 真実は空想の魔力を打ち破り 立ち上がる理性が 心を捉えていた昂ぶりを追いやり 知的な日を取り戻す
(42)	40	Thy pleasures, Moderation, give, in them alone we truly live.	そなたの快楽を、『中庸』よ、与えたまえ。 それにおいてのみわれらは真に生きるのです。

* NはNovello版の曲番号、HはHHA版全集の曲番号を示す。

本研究は JSPS 科研費 JP19K13225 の助成を受けたものである。

参考文献

- 1) 宮西光雄：ミルトン英詩全訳集 上巻(1983)、東京：金星堂
- 2) 榎山陽子，水野みか子：ヘンデル《陽気の人，ふさぎの人，温かな人》における歌詞の扱いと音楽——発音と韻律に着目して、芸術工学への誘い vol.24 (2020)、pp29～36
- 3) Lass, Roger: “Phonology and Morphology.” In *The Cambridge History of the English Language: Volume III 1476- 1776* (1999), p118. Cambridge: Cambridge University Press.
- 4) 榎山陽子：ヘンデル《メサイア》の歌詞付けと歌詞の発音——連声の技法をめぐって、『音楽表現学』Vol.13 (2015)、p6.
- 5) 中尾俊夫：音韻史（英語学大系 11）（1985）、p205、東京：大修館書店
- 6) Lass, Roger: “Phonology and Morphology.” In *The Cambridge History of the English Language: Volume III 1476- 1776* (1999), p96. Cambridge: Cambridge University Press.
- 7) 中尾俊夫：音韻史（英語学大系 11）（1985）、p396、東京：大修館書店
- 8) 中尾俊夫：音韻史（英語学大系 11）（1985）、p306、東京：大修館書店
- 9) Lass, Roger: “Phonology and Morphology.” In *The Cambridge History of the English Language: Volume III 1476- 1776* (1999), p100. Cambridge: Cambridge University Press.
- 10) Handel, George Frideric: *L'Allegro, il Penseroso, ed il Moderato (oratorio by Charles Jennens after John Milton) (HWV 55)*, Autograph. R.M.20.d.5 (1740). British Library.
(<http://www.bl.uk/manuscripts/Viewer.aspx?ref=r.m.20.d.5>, 2021.1.23.閲覧)
- 11) Handel, George Frideric: *L'Allegro, il Penseroso ed il Moderato*, edited by Donald Burrows. The Novello Handel Edition. Vocal Score (2014). London: Novello.
- 12) Smith, Ruth: ‘In this Ballance seek a Character’: The Role of ‘Il Moderato’ in *L'Allegro, il Penseroso ed il Moderato*. In *Music in the London Theatre from Purcell to Handel*, edited by Colin Timms and Bruce Wood (2017), pp175~189. Cambridge: Cambridge University Press.
- 13) Händel, Georg Friedrich: *L'Allegro, il Penseroso ed il Moderato*, edited by James S. Hall and Martin V. Hall. Hallische Händel-Ausgabe (HHA), Series I. 16 (1965). Kassel; Basel; London; New York: Bärenreiter.
- 14) Horace: *The Works of Horace*, The Project Gutenberg eBook of The Works of Horace (2004), (https://www.gutenberg.org/files/14020/14020-h/14020-h.htm#THE_SECOND_BOOK_OF_THE_ODES_OF_HORACE , 2023.2.15.閲覧)
- 15) 柳沼重剛編：ギリシア・ローマ名言集（2003）、p141、東京：岩波書店
- 16) Horace: *The Works of Horace*, The Project Gutenberg eBook of The Works of Horace (2004), (https://www.gutenberg.org/files/14020/14020-h/14020-h.htm#THE_FIRST_BOOK_OF_THE_SATIRES_OF_HORACE , 2023.2.15.閲覧)
- 17) 中尾俊夫：音韻史（英語学大系 11）（1985）、p423、東京：大修館書店

注釈

- 注1) 19世紀初めから綴字の影響で/j/の復元が見られるようになる¹⁷⁾。
- 注2) Smith (2017, p180)によると、Horace: *The Odes, Epodes and Carmen Seculare*. Trans. William Oldisworth, 3rd edn (1737). London.
- 注3) Smith (2017, p180)によると、H. Baker (ed.): *Medulla poetarum Romanorum or; The Most Beautiful and Instructive Passages of the Roman Poets* (1737). London.
- 注4) 第3部の中庸の人の役割やホラーティウスの考え方との関係については、Smith, Ruth: ‘In this Ballance seek a Character’: The Role of ‘Il Moderato’ in *L’Allegro, il Penseroso ed il Moderato*. In *Music in the London Theatre from Purcell to Handel*, edited by Colin Timms and Bruce Wood (2017), pp175~189. Cambridge: Cambridge University Press.で詳しく述べられている。